

主 題：礼拝でない礼拝

聖書箇所：ヨハネの福音書 4章22-23節

皆さんもよくご存じの通り、イエスがサマリヤを訪問されたとき、そこで一人の女性と会いました。そのことがこのヨハネの福音書4章に書かれています。井戸のところでイエスはその女性とお会いになって、彼女と話を始めるのです。皆さんがよくご存じの4章のみことばを見て行くと、明らかなことは、このわずかの会話を通してイエスはこの女性の罪を明らかにし、彼女がどのような存在なのかを明らかに示して行かれるのです。細かいところまでは見ませんが、「あなたの夫を呼んで来なさい」とイエスが言うと、「**私には夫はありません。**」と彼女は答えます(4:17)。「**イエスは言われた。「私には夫がない**というのは、**もっともです。:18 あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。**」と続いて記されています。どうでしょう？このようなことを突然、初めて出会った人から言われたら…？ 彼女はその恥部を隠しておきたかったのです。ところが、イエスは見事にそのことを話されたのです。非常な驚きが彼女にはあったはずですが、だから、19節でこのように言います。「**先生。あなたは預言者だと思えます。**」と、こういう反応をもって彼女はイエスに答えるのですが、その後、不思議なことを言っています。20節「**私たちの先祖は、この山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。**」、なぜ、このように話が変わったのでしょうか？「**あなたは預言者だと思う**」と、つまり、彼女はイエスのおことばを聞いて驚いてこう言ったのですが、その次に彼女は礼拝の場所のことを話します。ある人は、これは彼女が自分の非常にいやなところを指摘されたので話の話題を変えようとしていると言います。そのようなことは私たちもよくすることです。都合の悪い話になると話題を変えたいのです。しかし、どうもそうではないようです。なぜなら、この後、彼女が真理を求めて行くその姿を見て行くと、彼女はここで自分の罪が示されて自分の心が突き刺されて、では、どこに行けばこの罪のためのいけにえをささげることができるのか、どこへ行けばいいのか、そのことを考えたからこのように尋ねたのです。私たちの先祖はゲリジム山だと言うし、あなた方はエルサレム、どこへ行けばいいのですか？と。つまり、彼女の質問はどこで神を礼拝したらいいのかということです。ですから、イエスはその後、礼拝について話を始めて行かれるのです。21節にイエスのおことばがあります。「**イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。**」と、父を礼拝するということをイエスはその後話して行かれるのです。

皆さんに覚えていただきたいことは、彼女もこのサマリヤの人々も実際に礼拝を行っていた、しかし、彼らの礼拝は神に喜ばれるものではなかったということです。だから、私たちが今から見て行きたいのは、イエスが教えられた、神が受け入れられる、神がお喜びになる礼拝とはどういうものなのかということです。その前に、間違った礼拝についていくつか考えて見ましょう。なぜなら、そのような礼拝が実際に存在するからです。そして、気を付けなければ私たちもそのような礼拝に陥ってしまう可能性があるからです。創世記4:7に「**あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。**」とある通りです。

☆間違った礼拝とは

1. 聖書的でない自分勝手な礼拝をささげる

ある特定の場所だけを礼拝の所と考える、つまり、礼拝堂だけが礼拝の場所としているのです。だから、神を礼拝するためにはここに来なければならないと思っています。その人はここを離れると礼拝のない生活に戻ります。ここはイエス・キリストを信じる者たちが礼拝するために集まる場所に過ぎません。もし、だれかの家を借りてそこに集まるならそこには神がおられないのでしょうか？そのようなことはありません。また、このように考える人もいます。ある特定の時間だけを礼拝と考える、日曜の朝のこの時間だけが礼拝だとし、この時間さえ守っていればお勤めを果たしたことになると思っています。また、ご利益を求める人、礼拝に来れば神さまはきっと自分の欲しいものを与えてくれるに違いないと思います。その人はこれだけ熱心であれば神は私のことを祝してくださる、これだけ捧げれば神はきっと願い事をかなえてくださると思って礼拝に来ているのです。災いを避けるために来ている、礼拝に来ないと自分に災いや苦しみ、不幸が訪れるかもしれないと、そのように思って来ている人です。また、ある人は罪悪感から礼拝に来ています。自分のしたこと、犯した罪への罪悪感から逃れたいため、ある種のごんげの思いから教会に来ているのです。また、自分のために礼拝に来ている人、自分が霊的な気分になるために礼拝をささげているのです。賛美を繰り返して自らを高揚させて行こうとします。

ある人はこう言います。私は自分の疲れを癒すために教会に行くと。ですから、そのような人は自分が聞いて納得したり励まされたり、慰められるようなメッセージを聞きたいと思うのです。月曜日から土曜日まで疲れているのに、教会でまで責められるのはいやだから、何となく楽しいお話を聞かせてもらったら疲れが癒されると思います。その人はそのような話をしてくれる教会を求めて行きます。

このような人々が存在することは事実です。このような聖書が教えていない思いをもって礼拝に集まってくる人たちがいます。

2. 罪をもったままで礼拝をささげる

実際に、自分の心の中に罪をもったままで礼拝に集まって来ている人がいます。それは神がお喜びにならないということは皆さんよくご存じです。イザヤ1：11-17でこのように言っています。「あなたがたの多くのいけにえは、わたしに何になろう。」と、主は仰せられる。「わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。：12 あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、だれが、わたしの庭を踏みつけよ、とあなたがたに求めたのか。：13 もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙——それもわたしの忌みきらうもの。新月の祭りと安息日——会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。：14 あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、わたしは負うのに疲れ果てた。：15 あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。：16 洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。：17 善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。」、つまり、罪をもったまま集まってきた人たちがいたのです。神がそれに対して言われるのは「もううんざりだ、どんなものも受け入れない」と。アモス書にもこのように書かれています。5：14-15, 21-24「善を求めよ。悪を求めな。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたが言うように、万軍の神、主が、あなたがたとともにおられよう。：15 悪を憎み、善を愛し、門で正しいさばきをせよ。万軍の神、主は、もしや、ヨセフの残りの者をあわれまれるかもしれない。…：21 わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときのおおりも、わたしは、かぎたくない。：22 たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささげ物をわたしにささげても、わたしはこれらを喜ばない。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目もくれない。：23 あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。：24 公義の水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。」、ここでも神は預言者アモスを通して「あなたたちのいけにえをわたしは喜ばない」と言われるのです。つまり、あなたが礼拝するためにこの場に集まって来て、どのような思いをもって来られているのか分かりませんが、もし、あなたが罪をもったままで来て、それでも平気だとするなら、大きな間違いだということです。神はあなたのすべての罪をご存じで、その罪をもったままで集まって来るなら神はあなたの礼拝をお受けにはならないということです。

3. 礼拝する方を知らないで礼拝している

使徒の働き8章にエチオピアの宦官の話が出て来ます。エチオピアの宦官は礼拝するためにエルサレムに行っていました。8：27-28「彼は礼拝のためエルサレムに上り、：28 いま帰る途中であった。」。ところが、彼はその帰り道でイザヤ書を読んでいました。そして、御霊がピリポという一人の伝道者を通してこの人物に伝道して行くのです。30-35「そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。：31 すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言った。そして馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。：32 彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかつた。：33 彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」：34 宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」：35 ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。」、そして、彼はイエス・キリストを信じるのです。つまり、まだ救われていないのに、まだイエスのことを知らないのに、この宦官は礼拝に行っていたのです。そのような人がいることは事実です。サマリヤ人の問題もそこにあったのです。彼らは救われていませんでしたが、礼拝していたのです。

そこで、もう一度ヨハネに戻って、イエスが教えられる、神が喜ばれ受け入れてくださる礼拝とはどのような礼拝なのか、見て行きましょう。

☆神が受け入れてくださる礼拝とは？

私たちが特に見たいみことばは23節です。「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。」、ここに記されている二つのことを見て行きます。神が喜んでくださる、神が受け入れてくださる正しい礼拝というのは、「まことによる礼拝」と「霊による礼拝」です。そのようにイエスは教えておられます。

1. まことによる礼拝

それは正しい知識に基いた礼拝であるとイエスは教えてくれています。「まこと」、すなわち、真理です。22節には「**救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。**」とあります。イエスははっきり言われました。ここで使われている「**知って**」「**知らないで**」というギリシャ語のことばは、完全な知識を指すことばです。徐々にその知識を深めて行くというのではなく、完全な知識を指しています。だから、イエスはここであなたがたは神のことを完全に知らない、だから、あなたがたの礼拝は正しくないと言われるのです。私たちが神の前に正しい礼拝をささげるためには正しい知識をもつことが必要です。実は、そこに大きな問題があったのです。なぜ、そのような問題があったのかというと、サマリヤの人々は旧約聖書のみことばの中でわずかに最初の書、モーセ5書といわれている創世記から始まる五つの書しか信じていなかったのです。後の旧約聖書は放棄したのです。だから、彼らの知識は不完全だったのです。ですから、あなたがたが神を礼拝するのならしっかり神のみことばの真理に基づいてしなければならぬと教えられたのです。真の礼拝者、それは神のみことばに沿って礼拝を為す人たちです。当然のことです。なぜなら、神を崇めるなら神の与えてくださる教え、そのルールに基いて為すことが必要であるからです。崇めるのは神です。その方が私たちにどうすれば正しく神を崇めることができるのかを教えてくれているのですから、それに沿ってしなければ、自分勝手なルールでもそれは正しい方法だとは言えないのです。礼拝がどんなに人々に感動を与えても、心に興奮や覚醒をもたらしたとしても、また、人々が一生懸命熱心に犠牲的にささげたとしても、それが神のみこころに従っているものでなければ、神はお喜びにならないのです。私たちは自分を満足させることはできません。これだけのことをしているから、こんなことをしているから神は喜んでくださるに違いないと思う、しかし、私たちが考えなければいけないことは、それが神のみことばに一致したものかどうかです。そこをしっかりと見ていなければ、自分を満足させても崇拝の対象である神を満足させることはできない可能性があるのです。ですから、私たちはいったいだれを礼拝しようとしているのかを忘れてはならないのです。

ジョン・カルヴィンはこのように言っています。「主のみことばの光を失うとすぐに、暗闇と盲目が支配します。もし、我々が、また、我々の宗教が神によって認められることを望むなら、神のみことばから得た知識に寄りかからなければならない。」。当然のことです。もう一度、ヨハネの福音書4章を見てください。20節に「**私たちの先祖は、この山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。**」、彼女の間違いがどこにあったか、彼女は神を礼拝するためにはある特定の場所が必要であり、そこでしか礼拝できないと思っているのです。そこでイエスは21節でその間違いを訂正して行かれるのです。「**イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。」**と、場所ではないと言われています。イエスはこの女性との会話を通して、神が喜んでくださるまことに礼拝について、つまり、正しい知識に基づいた礼拝について二つのことを教えます。

◎正しい知識に基づいた礼拝について

1) 礼拝には制約、制限がない

イエスは場所ではないと言っています。つまり、私たちが神を礼拝するときには何か制限があるかという、ない、どこでも礼拝することができると言います。21節に「**そういう時が来ます。**」、23節にも「**礼拝する時が来ます。**」とある通りです。まだ、それは実際に訪れていないけれど、それがあたたかも起こったかのようにイエスは話しておられるのです。今までとは違う、神殿もいけにえもすべての儀式が終わる、そういう時が来ると言うのです。だから、イエスが十字架に架けられた後、何が起こったのか、マタイ27:51で教えるように「**すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。…**」と、それまでは大祭司が年に一度だけいけにえの血を携えてその至聖所、神との会見の場に入ることを許されたのですが、その幕が裂けることによって、いつでも、どんなときでも、私たちは動物の血ではなくて、イエス・キリストという神が備えてくださった完全ないけにえの血によって、そこに立つことができるのです。新しいときが来るとイエスは言われ、イエスの十字架の後、それが可能になったのです。だから、私たちはどこでも主を崇めることができる、どこでも私たちは聖なる神の前に立つことが許されたのです。

2) 礼拝するためには救いが必要

22節「**救いはユダヤ人から出るので、**」、これは救いに関する教えではないかと言う人もいます。確かに、神はユダヤ人を通してご自身を、また、神のみこころを明らかにして来られました。神はユダヤ人を使って神のメッセージを人々に伝えて来られました。しかし、ここで言っている「**救いはユダヤ人から出る**」はそのような教えではなくて「救い主」のことです。シメオンが幼子イエスをその腕に抱いたとき何と言ったでしょう？ルカ2:29-30「**主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、**

安らかに去らせてくださいます。:30 私の目があなたの御救いを見たからです。」と、ですから、ユダヤ人から救い主が誕生するのです。そして、私たちは父なる神を礼拝するのですが、イエス・キリストを通して礼拝します。ですから、父なる神を礼拝するために必要なことは、イエス・キリストを自らの救い主として受けることです。あなたが神を心から礼拝しようとするなら、あなた自身はこのイエス・キリストにしっかりつながっていなければなりません。イエス・キリストによってあなたのすべての罪が赦されていなければいけないのです。サマリヤの人々はそのことを知らなかったのです。イエス・キリストのこと、救いのことを知らなかったのです。エチオピアの宦官もイエスのことを知らなかった…。私たちが神に喜ばれる礼拝をささげるためには、私たち自身がイエスを知っていなければいけないのです。ですから、本当に神を礼拝できるのは救われている人だけ、クリスチャンだけです。自分の罪を責められ、神へのいけにえ、礼拝を考えたこの女性は、最初にどこで礼拝するのかという場所を考えました。しかし、イエスは本当の礼拝に必要なことは場所ではなくて、だれであるかを明らかに示されたのです。ユダヤ人として生まれたこのイエス・キリストこそがその救世主であり、もし、私たちが神に喜ばれる礼拝をささげようとするなら、礼拝者となることが必要であり、その上で初めてふさわしい礼拝をささげることができると言うのです。まことによって神を礼拝する、私たちは神のおことばである真理にしっかり立たなければいけません。

2. 霊による礼拝

これは心からの礼拝です。霊による礼拝というと、何か特別な体験であったり特別な経験、霊的な高揚であると思う人がいるかもしれませんが、そのことをイエスは教えているのでしょうか？霊によっての礼拝というとき二つのことが考えられます。人間の霊なのか、それとも神の霊、聖霊なのかです。恐らく、ここで言われているのは両方です。なぜなら、最初に言ったように、神が喜んでくださる礼拝をささげるためには、心からのものでなければならなかった、その心が礼拝するのにふさわしい状態になるためには、私たちのうちの霊が喜んで神を崇めるようになるためには、内在している聖霊の働きが必要なのです。聖霊を無視して私たちは心からの礼拝をささげることなどできません。神は私たちの心からの礼拝を望んでおられるわけです。マタイ15章でこのように言われています。パリサイ人や律法学者たちに対して、7節「偽善者たち。イザヤはあなたがたについて預言しているが、まさにそのとおりです。」と言い、そして、8-9では「『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。:9 彼らが、わたしを拜んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』」、イエスが教えておられることは、礼拝者にとって最も大切なことは心だということです。パリサイ人たちは神のために心からしていたのではなく、人の目を意識して見せ掛けでしていたのです。それをイエスは怒られた、責められたのです。皆さん、考えてみてください。どのような心の状態であなたは今日ここに集まって来たのか…。先ほど見たように、ここが唯一の礼拝の場所ではありませんが、ここが私たちが定めたこの地上において愛するクリスチャンの兄弟姉妹が集まっていっしょに礼拝をささげる場所です。今朝、私たちが目覚めてからどのような心の態度をもって神を崇めて来ましたか？家を出る前、ここに向かっている途中、そして、ここに着席してから、私たちの心は神に対する感謝にあふれていましたか？それとも、時間だから、日曜日だから、礼拝の日だから行かなければいけないと…。これはあなたが神の前に答えなければならないことです。神はあなたの心を見ておられます。どんな思いをもってここに集まって来たのか、どんな思いで賛美したのか、祈ったのか、ささげものをしたのか、みことばを聞いているのか、神はご存じです。あなたの礼拝は神に受け入れられますか？心から、私たちのうちなるすべてをもって神を崇めて行くためには、当然、神の助けが要ります。内在している聖霊なる神の助けが必要です。なぜなら、聖霊が私たちの心を支配するとき、内側から神への感謝と喜びが溢れて出てきます。強制されてではありません。しなければならぬからでもありません。自然に内側から生まれて来ます。それは私たちの心を聖霊なる神が支配しておられるからです。

ある神学者はこのように言います。「霊的に礼拝することは肉を満足させるだけのただ単なる外面的な儀式とは全く異なり、愛情のこもった心と啓発された思いからの敬意を神にささげることだ。」、神さま感謝です、あなたの御名を心から称えます、なぜなら、私たちの心が神のなさったみわざに対して、その愛に対して、愛をもって応えようとしているからです。私たちの心が神の真理によって啓発されているのです。真理が私たちの心に感動をもたらすのです。みことばを通して示される神のすばらしさに私たちの心が感動して行くのです。そのとき、ただ神を愛するだけではありません。私たちはこの神にハレルヤ！と賛美したくなるのです。そのような心の態度が必要だということを教えているのです。マラキ書にはこのように書かれています。1:6-14「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。——万軍の主は、あなたがたに仰せられる。——わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』と。:7 あなたがたは、わたしの祭壇の

上に汚れたパンをささげて、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか。』と言う。『主の食卓はさげすまれてもよい。』とあなたがたは思っている。：8 あなたがたは、盲の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないのか。足なえや病気のをささげるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところを差し出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。——万軍の主は仰せられる。——：9 さあ、今、恵みを受けるために神に願ってみよ。これはあなたがたの手によることだ。神はあなたがたのうちだれかを、受け入れてくださるだろうか。——万軍の主は仰せられる。——：10 あなたがたのうちにさえ、あなたがたがわたしの祭壇に、いたずらに火を点ずることがないように、戸を閉じる人は、だれかいないのか。わたしは、あなたがたを喜ばない。——万軍の主は仰せられる。——わたしは、あなたがたの手からのささげ物を受け入れない。：11 日の出る所から、その沈む所まで、わたしの名は諸国の民の間であがめられ、すべての場所で、わたしの名のために、きよいささげ物がささげられ、香がたかれる。わたしの名が諸国の民の間であがめられているからだ。——万軍の主は仰せられる。——：12 しかし、あなたがたは、『主の食卓は汚れている。その果実も食物もさげすまれている。』と言って、祭壇を冒瀆している。：13 あなたがたはまた、『見よ。なんとうるさいことか。』と言って、それを軽蔑する。——万軍の主は仰せられる。——あなたがたは、かすめたもの、足なえのもの、病気のを連れて来て、ささげ物としてささげている。わたしが、それをあなたがたの手から、喜んで、受け入れるだろうか。——主は仰せられる。——：14 群れのうちに雄の獣がいて、これをささげると誓いながら、損傷のあるのを主にささげざる者は、のろわれる。わたしが大いなる王であり、わたしの名が諸国の民の間で、恐れられているからだ。——万軍の主は仰せられる。——」。ささげるべき礼拝は儀式ではありません。

この「霊とまことによる礼拝」というのは私たちがしなければならないことです。強調されていることです。ヨハネに戻って、4：24に「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」とあります。イエスはなぜこのようなことを言われたのでしょうか？つまり、私たちが今見てきた「霊とまことによる礼拝」は神のご性質と一致するものだからです。神は霊だから、私たちがささげる礼拝は霊によってささげなければならないのです。私たちの心からの礼拝をささげるのです。そして、「まこと」とは、イエスがヨハネ14：6で「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。…」と、わたしが「真理」、すなわち、「まこと」だと言われたのです。だから、私たちは神が与えてくださったこの真理のみことばに基いて神を礼拝しなければいけないのです。

さて、私たちが今まで見てきたこと、それで分かったことは、礼拝というのはただの外面的な行為ではないということです。神に関する正しい知識に基づいて、うちからわき出て来る心の態度のことです。霊による礼拝は形式的な礼拝に反するものです。形だけの礼拝など神は関心がないのです。もし、私たちが礼拝の順序を重視しているなら、見るところが間違っています。神の関心は私たちの心です。私たちの弱さはすぐに形式的なものになることです。祈りがなければならぬ、賛美がなければならぬ、…、問題はなぜそのようなことをするのかです。神の関心は祈ることよりも私たちが本当に心から神を崇めることです。空しい賛美をささげるよりも一人ひとりが心から神に賛美をささげている、そういう礼拝者を神は期待し、その様な公同の礼拝を神は期待しておられるのです。ですから、霊による礼拝は形式的な礼拝に真っ向から反するものであり、まことによる礼拝は間違った神観に反するものです。正しい神観をもって正しく神を崇めなさい、どのような神を私は崇めているのか、どのような神が私の神なのか正しく知った上でその神を崇めなさいと言うのです。だから、私たちはこの二つ「霊とまこと」が神の前に正しい礼拝をささげるために必要だとイエスが教えてくださったことに気付くのです。このような礼拝者を神は求めておられます。あなたの礼拝はどうでしょう？あなたは本当に神の真理によって心が感動し、その神を心から崇める、そのような賛美をささげておられますか？イエスの尊い測り知れないご恩寵に対して、恵みに対して、大きな犠牲に対して、あなたは感謝をもって心から神を愛するその愛をもって神を崇めておられますか？このような礼拝でなければあなたのささげた礼拝は「わたしの前から退けなさい、わたしは受け入れない」と神は言われます。あなたの心がカギです。

A・P・ギブスはこのように言っています。「われわれの礼拝は神のことばの真理によって導かれるものであるだけでなく、それはまた真実をもってささげられなければならない。…礼拝の中には虚偽があってはならない。」と。今、見て来たように、神が与えてくださった真理に基づいて礼拝するのですが、同時に、私たちが神を礼拝するその礼拝に虚偽があってはならないのです。彼はこう言います。「まことということば、このことばは当時、蠟が入っていないという意味で使われた。昔、彫った石像に裂け目があると、そこを蠟で埋めることがよくあった。それを買った人がその石像を日光に照らすと蠟が溶けていることが暴露してしまう。それで石像を扱う人は自分の品物は「まこと」、すなわち、蠟なしであると声明した。こうして、売り手は買い手に偽物、見せ掛けでないことを保証した。」。あなたの礼拝には蠟が混じっていないでしょうか？あなたは確かにここに座っておられますが、あなたの心には偽りがありませんか？神を崇めているけれど実は心から崇めていない、そのようなことがないでしょうか？皆さん、私たちは衿を正して神の前に立たなければいけません。自分の心を吟味して神の前に立たなければいけません。形だけの礼拝をささげているなら空しいことです。神はお喜びになっておられません。

神が望んでおられるのは心からなる真実の礼拝です。あなたはそのような礼拝者ですか？あなたはそんな礼拝者になろうとしていますか？みことばに従うことです。そのとき、神はあなたの礼拝を喜んで受け入れてくださるのです。